

進捗状況の概要【1ページ】

千葉大学は、「グローバル千葉大学の新生」のもと、「4つの改革」+「3つの力の育成」+「4つの独自目標」でスーパーグローバル大学創生支援事業を推進しており、これまでの3年間の成果を以下のようにまとめることができる。

■4つの改革(ガバナンス・学修制度・プログラム・ネットワーク)による大学の新生

(1)ガバナンス改革による新生 平成28年4月に、国際教養学部を設置した。グローバル人材育成推進事業で開始した副専攻「国際日本学」を進化させた学部であり、本事業における一番大きな成果である。千葉大学における新学部の設置は、41年ぶりであり、大学を新生する牽引役として、かつ全学のグローバル教養教育を担う母体として設置した。また SULA(Super University Learning Administrator)という新たな学修支援の専門職員を全学に配置し、現在は12名でテラー・メード教育を実現している。

(2)学修制度改革による新生 平成28年度より、1年を8週ずつ6つに分割した「6ターム制」を導入した。これにより、海外のすべてのアカデミック・カレンダーに対応でき、日本人の派遣と、外国人の受入を飛躍的に伸ばしている。また、学内教育制度の国際標準化として、コース・ナンバリング、2言語シラバス、デジタル・ポートフォリオを導入し、学生一人一人の学修をきめ細かく手助けしている。さらには、飛び入学の制度をこれまでの3学部から全学部へ展開するための実質的な討議が始まっている。

(3)プログラム改革による新生 30単位以上の国際日本学(マイナー)科目の履修で、マイナー・ディグリー(履修証明)を、18-24単位以上でサーティフィケート(履修証明)を発行する新たなプログラムを平成28年度入学の学生から実施している。これ以外にも、国際日本学の全学生への必修化を行なった。平成28年度より全学生が国際日本学の授業を受講している。また、グローバル・プログラムとして50科目以上の派遣プログラムと、40科目以上の受入プログラムを構築した。これにより、最終年度の目標人数である1,200人の派遣と3,000人の受入を目指す。

(4)グローバル・ネットワーク改革による新生 バンコク、ベルリン、サンディエゴに海外キャンパスを設置する。バンコクは平成29年秋より開設し、全学で利用する。初年度は30のプログラムを実施し、日本人学生の派遣と現地での留学生の受入の両方を実現する。ベルリンは、大学院を中心として全学で利用していく。サンディエゴは、生命科学系で利用する。また、アライアンス交流を推進し、AUN及びE9(中国・卓越大学連盟)と連携協定を締結した。

■3つの力(「俯瞰力」「発見力」「実践力」)の育成

千葉大学では、人間力を身につけるために、「俯瞰力」「発見力」「実践力」の3つの力をアクティブ・ラーニングで育成するプログラムを順次構築している。国際教養学部では基本的に全てをアクティブ・ラーニングとして実施する。

「俯瞰力」 国際教養学入門等を中心とした全く新しい教養教育で実現

俯瞰力育成に必要なスキル形成科目を実施 アカデミック・リーディング/アカデミック・ライティング

「発見力」 進化したディープ・アクティブ・ラーニングによるイノベーション教育で実現

異なる学部間でのチーム学習 生命科学での医薬看共同学習をモデルにしたプロフェッショナル教育

「実践力」 グローバル・インターンシップ、グローバル・ボランティアで体験学習

専門領域で高度なJBL(ジョブ・ベースド・ラーニング=業務実践型プロジェクト)の実施

以上のように、3つの力を育成するプログラムを実施している。

■千葉大学を新生する4つの独自目標「753+1(シチゴサン タス イチ)計画」

「7」700科目に及ぶ英語による授業を増加し全学で実施 現時点で559科目(420科目増加)を実施しており、最終目標1,200科目の47%をクリアしている。例:デザイン・シンキング、イノベーション・プログラム等。

「5」入学定員の50%に相当する1,200人の学生を派遣 JASSOの「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」で4年連続国立大学1位を獲得し、年間600人を派遣した。それ以外にも派遣200人程度で、目標の600人をクリアしている。この数は最終目標1,200人の55%であり、順調に増加している。

「3」3,000人の留学生を受入 平成26年度よりパイロット・プログラムとしてショート・プログラム実施。平成28年度には約300人を受入れた。その結果、平成28年度は1,614人を受入でき、目標の1,600人をクリアした。

「1」多様な入試で入学定員の10%=240人を選抜 国際教養学部及び教育学部で外部の英語検定試験のスコアを利用した入試を実施。また、韓国や中国での海外入試を実施。現在110人で最終目標の半分となっている。

以上のように、「4つの改革」+「3つの力の育成」+「4つの独自目標」でグローバル化を展開しており、計画した構想をすべてクリアしている。中でも、「国際教養学部」はパイロット学部として位置づけており、新しい試みをまず「国際教養学部」で実施し、その後全学に展開するようになっている。まさにグローバル化の牽引役を担っている。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

●全学の新たな教養教育を担いグローバル化を牽引する「国際教養学部」の設置

千葉大学が推進しているスーパーグローバル大学創成支援事業における大きな柱は、「新」教養学部の設置である。この成果として、平成 28 年度に「国際教養学部」を設置することができた。国際教養学部は、本事業の構想を全て実行する学部となっており、千葉大学のグローバル化を牽引している。

■1997年 J-PAC(短期受入)→2013年国際日本学(グローバル人材育成支援)→2016年国際教養学部

国際教養学部は、J-PACからはじまっている。J-PACとは、Japan Program at Chibaの略で、短期の交換留学生用に提供されている授業科目群(英語)であり、教養科目として日本人学生にも開放されているものである。この科目群をもとに、グローバル人材育成支援において、プロジェクト型授業、インターンシップ、ボランティアを追加し副専攻プログラム「国際日本学」を設置した。さらにこれを進化させ、新たなプログラムとともに国際教養学部を設置した。

■国際教養学部における4つの改革の具体的事例

国際教養学部は、文系でも理系でもある学部として設置している。千葉大学における新たな文理混合教育の試金石とし、様々な授業をラインナップしている。このような中で、以下のように具体的な4つの改革を展開している。

(1)ガバナンス改革



(1-1)文理混合型の高度な教養教育の実現のために、専門科目はグローバルスタディーズ(文)・現代日本学(文理)・総合科学(理)を均等に用意し、学生が自分の学習スタイルに合わせて混合させて学習している。また授業は、可能な限りディープ・アクティブ・ラーニング・スタイルで実施している。

(1-2)SULA2名を配置し、学生に対応している。現在は、2年次の留学の相談を常時実施しており、オフィス・アワーにおける学生とのミーティングの実施状況は100%となっている。

(2)学修制度改革



(2-1)全授業6タームに完全対応 国際教養学部で実施している授業は、8週間1単位が基本となっている。細分化された授業を実施することで、細かい学習が可能となり、ディープ・アクティブ・ラーニングが可能となっている。また、各ターム10単位を上限にしており学習の質保証につなげている。

(2-2)多様な入試 国際教養学部では、3つの異なる入試を実施している。AO入試ではユニークな課題論述の試験を実施し、特色型入試では英語による面接を、通常型入試では外国語検定試験のスコアで加点・満点を採用している。

(3)プログラム改革



(3-1) 国際教養学部の学生は、卒業要件として留学を必修としている。そのための専用の留学プログラム(全学実施を含む)を平成28年度より15プログラム構築した。プログラムの内容は、発展途上国でのインターンシップ、海外での教育体験、プログラミング学習等、文理の多岐にわたっている。

(3-2)国際教養学部の授業は、他の学部からマイナー・プログラムとして履修が可能である。これは、国際日本学の一部として他学部に開放しており、30単位以上でマイナーの学位を付与するシステムとなっている。

(4)グローバル・ネットワーク改革



(4-1)プログラム改革で開発した留学プログラムは、多様なレベルで用意されており、可能であれば複数回の留学を行うように学生を指導している。特にイントロダクションの留学プログラムであるBOOTプログラムは、アジアのトップスクールで英語と現地の文化を学ぶ優れたプログラムである。

(4-2)全学利用の海外キャンパスとして、平成28年度に設置予定であったマヒドン・キャンパスは、諸般の事情により平成29年秋となるが、すでに30以上のプログラムが準備されており、設置以降に即時利用を開始していく。

■国際教養学部から全学へ

国際教養学部の学内への波及効果は大きい。その大きな一つが、留学ガイダンス等への延べ参加人数が、これまでの4倍の1,800人に達したことである。国際教養学部の学生が全員参加していたとしても、1,600人以上が全学から参加している。留学必修の学部ができたことで、留学への興味が全学に広がった。これ以外にも、イングリッシュ・ハウスの利用者数が1,000人を超える、留学プログラムの増大などもあるが、国際教養学部の波及効果は計り知れない。

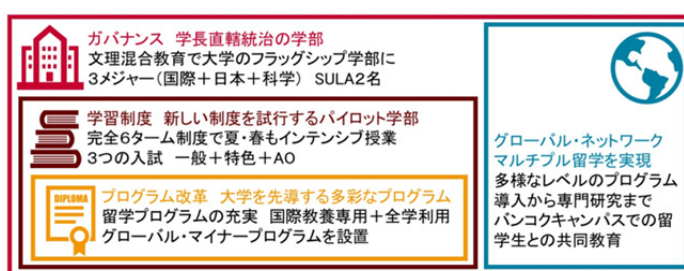


図1 国際教養学部の4つの改革